

氏 名 津 田 順 子

学位（専攻分野） 博士(学術)

学 位 記 番 号 総研大甲第238号

学位授与の日付 平成9年3月24日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻

学位規則第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 神歌の伝承と変成

-沖縄県宮古島狩俣集落の事例から-

論 文 審 査 委 員 主 査 教 授 鈴木 貞美

教 授 井波 律子

助 教 授 光田 和伸

教 授 古橋 信孝（武蔵大学）

谷川 健一（日本地名研究所）

本研究は、沖縄県宮古島の狩俣^{カリマツ}に伝えられている神歌（神に関わる歌の総称としてこの語を用いる）を対象として、以下のような目的を設定して研究を行う。

文学（歌）が神のことばからはじまったと考えたのは折口信夫であった。ある文章が定型を持ち、永く記憶されて伝承されるほど値打ちがあるとされたのは、それが神のことばだったからだと考えたのである。

折口の言う「神」とは、「種族の意向」の上に立つ神であった。それは、あくまで「種族」にとっての神であり、神に憑かれる人、一人一人にとっての神ではない。そのような神を折口は問わない。神を一人一人の固有の体験の問題として問うことをしないのである。一人一人の体験の中に現れる神は、いつも同じ相貌の種族の神だったろうか。そうではないだろう。そういう人たちにとっての体験としての神を考え、それが、種族の神とどのように関わるのかを具体的に考えてみる必要がある。

数年にわたって同じ村落の祭祀を見ていると、様々な変容を見出すことができる。本研究で述べる沖縄県の宮古島の狩俣集落では、神のお告げによって共同体の祭祀が改変されることもある。この場合狩俣では、神と直接交流のできる人が神の意志を共同体の神役たちに告げるのである。そして様々なプロセスを経て、時には、改変が実行される。ひとりの神がかりにとっての神と、共同体にとっての神とが、相互に交渉しながら、集落の祭祀世界を形成しているのである。したがって、問うべきは、その動的なプロセスであると考えられる。

以上をふまえ、私はまず、個にとっての神というものに焦点を当ててみる。共同体と個とを固定化して考えるのではない。私が見たいのは、それらの具体的な、動的な関係である。一人一人が祭祀世界に対して、どのような価値観、論理、世界像を持っているのか。そのことが当人の生に、どのような意味をもたらしているのか。そして、ある一人の論理や世界像が、別の一人の論理や世界像、あるいは共同体の論理や世界像と出会い、その間に対立や矛盾が生じた場合、どのように解決され得るのか。そのことによって、それぞれの世界像はどのように変容するのか。さらに、そのような個々の意識変容は神歌の表現とどのように関わってくるのか。以上の問題を、沖縄県宮古島の狩俣集落の神歌の事例から考えてみることに、これが本研究の目的である。

論文の構成は以下の通りである。

第1章では、まず、「神役」と「巫者」という概念について考察した。南西諸島の民

俗宗教研究においては、宗教的職能者をその職能から大きくふたつのカテゴリーに分けて考えてきた。ひとつは村落共同体の公的な祭祀を司る者（神役）、もうひとつは個人や家の私的祭祀を司る者（巫者）である。狩俣では、神と直接交流のできる巫者が、共同体の「神役」となることもある。「神役」就任期間は巫者としての活動はできないのだが、神との直接交流の能力が失われるわけではない。一人の人間の動態として見る時、「神役」と「巫者」とは分けがたいものとなる場合がある。

神と直接交流し、その命を受けている者は、その人自身の「神」の徹底的な統制下で生きることになる。したがって、その人が「神」から指示を受けた場合には、その内容が、共同体の祭祀の改変に関わることであろうとも、実行に移さねばならなくなる。巫者の変革的な性格は、ここに根ざしている。一方、神と直接交流する能力のない人は、前任者から伝えられたことが唯一の正しいことである。したがって祭祀の改変の申し出があっても、これまで通りのやり方を守らなければならない。両者の主張のどちらが「是」とされるかは、結局実践してみなければわからないというところで決定されてゆく。改変してみて集落に災厄などが生じなければ、その改変事項は定着する。災厄が生じれば、すみやかに原状回復がはかられるのである。狩俣の祭祀では「昔のまま」が「是」とされ、守ろうとする側も、変革しようとする側も、それぞれに「真」である「昔のまま」を持っている。それがコンテクストに応じて相互交渉し、新たな「昔のまま」が形成されることになる。

第2章では、神歌を歌う人間が、どうやって育てられ、神歌を口にするにいたるのか、個から個へ、神歌はどのように受け継がれているのか、そのことについて、ひとりの神役の具体的事例に即しつつ論じた。狩俣の神役たちは、それぞれが独自の役割を与えられており、神役としての仕事は、基本的に、同じ神役間で継承され、他の役に就いている神役にはわからない部分がある。神役個々が「秘技・秘伝」を持っているのである。神歌もまた、一人の神役から一人の神役へと伝承されるものを含んでおり、その神歌を歌うことを委ねられた人だけが音声化できるという点において、「秘技・秘伝」と言ってよいものと考えられる。神役たちは、前任者から「ひと声ひと声」習ったものをそのまま歌う。「変えてもよい」とは、現在の狩俣では思われていない。実際の祭祀の場には、誰の場合でもそう言えるわけではないが、前任者がいて、後継者の歌うのを聞いている場合もある。また、直接の前任者でなくても、神役経験者など、前任者の歌うもの

を聞いてきた人たちがいる。そういう場で、神歌を間違えたりすると、知っている人から指摘されることもある。公開されつつ伝承されることで、神歌は、大幅な改変が生まれにくいものとなる。だが、最終的には、その神歌を歌うことが一任されている神役に、すべてが委ねられている。神歌は、これを歌うことを一任されている人と、それ以外の人たちとの緊張関係の中で、一回ごとに「正しいテキスト」が了解されるというかたちで生成していると言える。

第3章では、狩俣の神歌の基本様式を概観し、続く第4章以下での個々の神歌の分析のための予備的考察を行なった。

第4章、第5章では、一柱一柱の神の事跡が歌われるタービとフサというジャンルの神歌について具体的な分析を行なった。

第4章では、狩俣の神役組織のリーダーであるアブンマという神役の女性の説明から、タービ（崇べ）という神歌が、神の「思い」を言うものであることを明らかにした。神の思いをそのまま汲み取り、神歌としてその思いを歌うこと、それがすなわち、「崇める」という意味の「タービ」である。さらに神役経験者の説明から、タービは、「神のもの」という点において、フサと明確に区分できないものであることが明らかになった。

第5章では、フサという神歌が、自分に憑依しようとしている神々の存在に苦痛を覚えた人が、神に向かって「どうぞやわらいでいて下さい」と言うことからはじまるものであることを明らかにした。そうしているうちに神が憑依してきて、神が神自身のことを語り出してしまうものがフサである。神役経験者の女性が、「神のもの」という点で、タービとフサとを同じものだと説明するのは、これらが、「思い」を歌ってもらいたいと現れて来る神の、その「思い」を歌うものである、ということによるのだろう。タービやフサは、「思い」を歌ってもらいたいと、その存在を告知させる神の「声」を、否応もなく聞いてしまった人のものである。神歌が、ある特定の神役に委ねられて音声化されるのは、その神役が、理念型として、神の「思い」を聞くことのできるものとして存在する、あるいは、そのことが期待される者として存在するからではないか。

終章では、神歌の変成のプロセスを、仮説として提示した。

前述の通り、神と直接交流し、その命を受けるということは、その人自身の「神」の徹底的な統制下で生きることを意味する。それ故にその人は、変革的な性格を持ってし

まう。神の「思い」を汲み取れる人は、神に抗うことができない人である。タービヤフサが、神の「思い」を歌うものであるということは、そのような変革性を持った人が、その生成と伝承に関与してきたことを示唆している。

神歌は、それを音声化できるただひとりの神役に委ねられてあるものだ。もしその人に巫者的能力があったとすれば、そこには新たな神歌が生成する場が形成される。1960年代に宮古島各地の集落祭祀を調査した鎌田久子は、神がかりしなければ共同体の神役を担う能力はないと述べている。そういう時代を狩俣が経てきたとすれば、狩俣の神歌は、神と直接交流ができるが故に、否応なく変革的性格を持ってしまう人たちの意識の中で、変成する可能性を常に含みながら伝承されてきたことになる。それは、いつでも「可能性」として存在する。なぜなら神というものはその絶対性ゆえに、どこまでも気紛れなものであるからだ。神は、時と場所を定めてやってくるとは限らない。神との直接交流は、いきなり、はじまってしまう。前の人から教えられたとおりにやっても、神は納得してくれないこともある。だからこわいのである。そのこわさこそが変革性の根拠でもあり、保守性の根拠でもある。その相反する意識の狭間で、いつ変成するともしないとも決めがたく、一回ごとに生成するのが神歌であると考えられる。

(論文審査結果)

本論文「神歌の伝承と変成－沖縄県宮古島狩俣集落の事例から－」は数年間にわたる綿密な実地調査を通じて、沖縄県宮古島狩俣集落に伝わる神歌がどのような形で伝承され、またその過程でどのような変容を蒙るかを、具体的に追究したものである。本論文では、これまでもっぱら共同体の視角から追究されてきた神歌のうたわれる祭祀世界を、実際にその世界において重要なファクターをなす神に憑かれる人(神役)の個の側面に焦点をあてて論じたところに従来の研究にみられない新しさがある。神と共同体の間にある個としての神役に焦点をあてることによって、彼らの一人一人がどのように神と関わるか、またその神との個々の交流体験が、いかにして共同体の神に関わっていくか、その過程が明確にされるのである。

本論文が対象とする狩俣集落では、一つの祭祀についてみても、この数年の間にさまざまな変容を蒙っている。神と直接交流する人(神役)が個の位相で受けとめた神のおりおりの意志を、共同体に伝える過程で、神歌の表現が変化し、さまざまなプロセスをへて、共同体の祭祀世界が改変されていくのである。本論文はこの点に着目し、五章にわたって狩俣集落における神歌と祭祀世界の伝承と変成のプロセスをきわめて動的にとらえることに成功している。ちなみに全五章の概要は以下のごとくである。

第一章「「神役」と「巫者」」では、二種の宗教的職能者、すなわち公的な祭祀を司る「神役」と私的祭祀を司る「巫者」が神と直接交流しうるその能力によって分かちがたくなるケースを論じている。

第二章「神人になる」では、神歌をうたう人間がいかに育てられ、個々の神役から神役へ神歌がいかにして継承されていくかを具体例に即して明らかにしている。

第三章「神歌の基本様式」、第四章「神歌の表現エタービ」、第五章「神歌の表現Ⅱフサ」では、神歌がまさしく「うた」としてメロディーやリズムの面からも考察されており、本論文の白眉といってよい。こうして「うた」として神歌をとらえる操作は非常に独創的であり従来の神歌研究にないすぐれたものとして高く評価される。

以上、本論文では狩俣集落の神歌の伝承と変成を論じるにあたり、神と共同体の間に個(神に憑かれる人)を設定し、これを核として神歌が歌われる現場の具体的調査と神歌じたいの検証を通じ、実証的に論を積み重ねて従来の研究とは異なる新たな分野を切り開いている。論旨の展開方法にも非常に説得力がある。よって、本論文は博士論文に十分に値するものであると判定する。